

### 今号の内容

ページ

- ◆日本三大つるし飾りサミット in 柳川 2・3
- ◆柳川雛祭りさげもんめぐりが始まる 4・5
- ◆老人保健福祉計画へご意見を、消防出初式 6・7
- ◆矢部川大橋3月14日開通、男女共同参画講演会 8・9
- ◆市民のひろば(10-11) ◆川柳(11) ◆図書館・水の郷ニュース(12-13) ◆情報わいど(14-19) ◆がんばったね(20) ◆もちふみデビュー(21) ◆保健ガイド(22-23) ◆新市史抄片(24)



## 地域の安全と安心を守る 市消防出初式

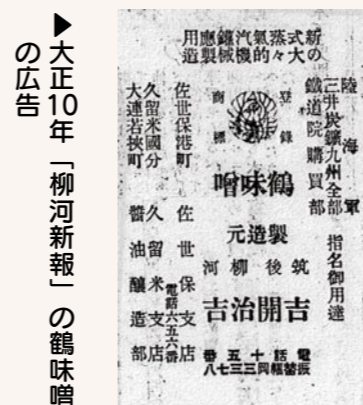
詳しくは、7ページに掲載

## 明治・大正の柳川―近代化とみそ・しょうゆ―

日本人の食卓に欠かせない調味料であるみそとしょうゆ。現在、スーパーに行けばたくさん種類から選ぶことができます。今では多くの家庭で買ってくるものであるみそとしょうゆですが、明治のころには家庭ごとで作ることも珍しくありませんでした。



▲大正期の沖醤油（大柳河紹介映画より）



▶大正10年「柳河新報」の味鶴の広告

い村ほど高く、多いところでは、しょうゆの自家生産率は60%を越え、みそに至ってはすべての家庭が自家生産をしている村もありました。

一方で都市的な性格が強かった柳河町では、わずかに6%程度の家庭で自家生産しているだけでした。このころすでに都市では、みそとしょうゆは買うものだったようです。

明治45年（大正元年）の『福岡県統計書』を見ると、福岡県内のみそとしょうゆの生産額が大きいのは福岡市や北九州、筑豊地方などの都市部の周辺で、久留米や大牟田に近い山門郡は県内3位、みその生産は県内生産総額の約70%を占めての1位でした。この山門郡の中でもその生産のほとんどは、柳河町と三橋村で行われていたことが大正8年の「山門郡

生産物一覧表」からわかります。明治末の柳川は福岡県内におけるみそとしょうゆの主要産地だったのです。

明治大正期の「柳河新報」を見ると、味鶴、富士味噌、旭味噌、林醤油、沖醤油など多数の醸造元の広告が掲載されています。その中には「蒸気応用」「陸軍御用達」「三井鉾山御用達」などの記述が目につきます。日本の近代化の中で、みそやしょうゆの生産も機械化が進み、また大きく成長する都市は多くの消費者を生み出しました。各家庭で作るものであったみそとしょうゆも、近代化の中で産業として大きく成長していったのです。

みそとしょうゆの福岡県内の生産量は昭和10年にはしょうゆは2倍に、みそは5倍に拡大します。こうした中で県内生産量に占める山門郡の割合は小さくなっていきますが、主要産地として確かな歩を進めています。今でも柳川市内の重要な生産品です。近代から現代へと続く地域の味を味わってみたいかがでしようか。

市史編さん係 宗 建郎

### 編集後記

●最近の年越しは、家でビール片手に紅白が定番だったが、今年は沖端キャンドルカウントダウンの取材で、酒なしの大みそかを迎えた。晩酌抜きで夕食を終え、11時過ぎに家族で会場へ。寒風の中、掘割沿いに揺れる炎と、ナイアガラ花火の美しさに感動の年明けを迎えられた。（勇人）

●最近、周りに理不尽な要求をする人がいませんか？ みなさん忙しく、イライラしているのかも。自分自身を振り返ると、朝から夜遅くまで働いて、家に帰ると子どもたちは寝ている。休日を返上し、仕事に出てくることもしばしば。もう少し余裕のある社会にならないものか？（康弘）

●今年は、神社仏閣を訪ねる機会が多く、たくさんの方々にお願いができました。そこでつい「これだけお願いしたから聞いてもらわねば」と呟いてしまった。友人から「その発想がいけない」と注意され、慌てて願い事を変更。「神様今の言葉を取り消してください。お願いします」（久美子）

### 人のうごき

平成20年12月末現在

- 人口 73,496人（前月比-28）  
男 34,758人（-15）  
女 38,738人（-13）  
出生 48人、死亡 66人  
転入 118人、転出 128人
- 世帯数 24,279世帯（-10）